

# 長崎県福江市方言の研究

## ——家中（城下町）方言——

三十三回生 池末寿美子

### 序

福江は、長崎から西へ百キロの所に位置する五島列島の中心地である。これまで、方言研究の本格的対象となっていなかったが、著者が福江出身ということを生かして、いかなる方言が存在するのか明らかにしていきたい。

この論文では、できるだけ言語生活の実態を映し出すべく、文表現法を中心に行っている。しかしながら、実態を理解するためには、その特徴的な音韻や動詞などの活用を知ることが不可欠であるから、文表現法に登場するこれらの説明を始めに総括しておくことにする。

※調査結果は、老年層（八十四～五十六歳）、若年層（二十二～十五歳）に分けてまとめている。

### 第一章 音韻

福江方言にみられる特殊な音韻変化を取りあげる。

① /ki/・/ku/・/tʃi/・/tsu/・/gi/・/ri/・/ru/の音が語中語尾で促音Qとなる。

月 /cuQ/・町 /maQ/・着 <sup>e</sup> /kiQ/・取りに行く

/toŋa:Q/

② /gi/・/gu/・/zi/・/zu/・/ni/・/nu/・/bi/・/bu/・/mi/・/mu/が、語中語尾で撥音Nに変化する。

右・水・耳 /miN/・泳 <sup>u</sup> /o:joN/・味 /aN/

遊 <sup>u</sup> /a:soN/・読む /joN/

③ /si/・/su/・/so/・/gi/

裸足 /hadagi/・愚 <sup>u</sup> /mu:giiko/

あそこ /a:giiko/

尚、島は /sima/であるが、女島 <sup>u</sup> と熟すると /me:ima/ 四角 /sikaQ/ は、長四角となると /naga:giikaQ/ であるから、この法則は語中語尾に限られることがわかる。

④ /um/ → /uNm/

生まれ /uNmare/ 梅 /uNme/ りんご /uNmaka/ と、/u/と/mの間にNが入る。全島で慣用的に使われている。

⑤ 連母音が ja となる例がみられる。しかし、若年層にお

いて聞かれることは稀で、促音・撥音化が全体に強く残っているのに比べて、今や消えつつあるようだ。

毎日 /mja:niQ/ 帰る /kja:Q/  
 灰・蠅 /ɟja: / 具合 /guja/

第二章 動詞・形容詞・形容動詞の活用

動詞活用表

	五	段	上	二	下	サ	カ
	死	蹴	置	漕	見	起	出
	ぬ	る	く	ぐ	る	る	る
	si	ke(r)	ko(g)	ko(g)	ok	uk	uk
	2	1	1	1	1	1	1
	a	a	a	a	e	e	e
	(N)	(Q)	(N)	(Q)	(Q)	(Q)	(Q)
	(N)	(Q)	(i)	(ee)	jaj	jar	jar
	(N)	(Q)	(Q)	(Q)	(Q)	(Q)	(Q)
	(N)	(Q)	(Q)	(Q)	(Q)	(Q)	(Q)
	c	e	e	e	ere	ere	ere
	o	o	o	o	iro	iro	iro

活用の種類は、五段・上一段・下二段・サ変・カ変の五

種類である。活用表から特徴をひろってみると  
 ①文語の下一段・上二段・ナ変・ラ変所屬語が五段に統合している。  
 ②下二段活用が存在する。  
 ③仮定形と命令形は完全に統合してしまっている。  
 ④上一段活用は、五段活用にほとんど統合しかかっているが、連用形が不完全である。

形容詞・形容動詞  
 形容詞・形容動詞の活用

基本形	語幹	終止・連体	連用	完了	仮定
良カ	じー	oka	oɰ	okaQ	okare
ヌッカ	nu-	oka	kuɰ	okaQ	okare
ウレノカ	ure-	ɟika	juɰ	ɟikaQ	ɟikare
静カカ	sizuk-	aka	oɰ	akaQ	akare
シカッカ	sika-	oka	kuɰ	okaQ	okare

福江方言では、形容詞・形容動詞ともに終止形が「カ語尾」である。二つとも、ほとんど同じ活用のようだが、ただ一ヶ所形容動詞の連用形において異なる。ここではで終わるといふ古い形が目につくが、現在では老年層のみ存在するだけである。従って、現在の言語生活では、形容詞と形容動詞はほとんど融合してしまっているといえる。

### 第三章 文表現法

ここでは、「九州方言の基礎的研究（九州方言学会）」の調査項目および設問と、「全国方言辞典②（立山輝男編）」の「基礎語彙調査項目助詞・助動詞その他」をもとに、調査を行なった結果から論じていきたい。但し、紙面の関係から、ここでは特徴的なものだけを取り上げることにする。

#### 一節 文末部

##### ①「ナー」・「ネー」

○キョーア、アツカナー。（今日は暑いですなえ。）

○バスア オソカナー。（バスは遅いなえ。）

「ナー」と「ネー」は、どちらも詠嘆の意と同時に呼びかける相手に同意を求めた言い方である。但し、「ナー」は目上の人や挨拶の時に使用し、「ネー」は同輩以下に極打ち解けた気分で言う。つまり、「ナー」と「ネー」を比べると、「ナー」の方が待遇敬意が高い。

##### ②「シタ」

伝聞の意である。

○ケガン ヒドヒテ アユバエントシタ。

（怪我がひどくて、歩けないんだってよ。）

多分に感情が入っており、「いだってよ」の後に、「大変だねえ」とか「すごいねえ」などの感嘆した言葉を補って考えると、この「シタ」が理解しやすい。

##### ③「ジャン」

○コンモンダイヤ、マエモ シタジャン。

（この問題は、前もしたじゃない。）

断定や主張する時に聞かれ、相手の同意を求めている。男女を問わず、また若年層でも盛んに使われている。

#### 二節 述部

##### ①進行態「ジョッ」と既然態「チョッ」

進行態は「ジョッ」で表わす。これは、九州全般で言われる「動詞連用形+ヨル」の転化であろう。上接の動詞を促音化させない場合、「ヨッ」形が聞かれる。

○アガア ドケ イッジョットカ。（君はどこへ行っているのか。）

○フネノ ミナト ハイッテキョッヨ。（舟が港に入ってきているよ。）

「ジョッ」に対して、「チョッ」となるのは既然態を表わすときである。

○キョーア、アカカ フクバ キチョッ。（今日は、赤い服を着ている。）

これは、「しておる（動詞連用+助詞「テ」+オル）」からの転化形と思われる。この「しておる」の形は、老年層において「アラ、モー カラッオッヨ。（あら、もう帰っているよ。）」などのように聞かれるが、現在では「チョッ」が圧倒的である。

##### ②推量の「ジャロ・ヤロ」

○ソッカツナラ、ヨー ミュッジャロ。（そこからなら、よく見えるでしょう。）

○アツモ、キョーンノヒルン フネデ ナガサツ イッヤロ。（あの人も、今日の昼の舟で長崎へ行くだろう。）

このように、福江方言では「ジャロ、ヤロ」によって推量を表現する。「ジャロ」と「ヤロ」を比べてみると、「ジャロ」は全層で、「ヤロ」は専ら若年層で聞かれる。つまり「ヤロ」の方が、比較的新しい表現ということではないだろうか。

③ 可能の「ユッ」「ルッ」

福江方言では、能力可能と状況可能とをきちんと区別する。

(ア) 能力可能

○ アガー 百メートル オヨガユッカ。(君は百メートル泳げるか。)

能力可能は「ユッ」で表わす。しかし、例文をみてもわかるように、連用形に接続すべき「ユル」が、福江方言では「オヨガ」と、否定形に接続している。これは、「ユッ」そのものが「〜できる」という意ではなく助詞「ワ」が「ユル」の前について「動詞連用形+助詞『ワ』+ユル」の形が熟合したものと考えられる。(jogajuru) ↓ jogajuru) 福江方言では、助詞「ワ」は熟合しやす性質(※三節主部に説明)からも想像できると思う。従って、そのまま共通語になおすと、本来「泳ぐことができるか」のような言い方をしているわけだが、結果として「動詞語幹+『a』+ユッ」で「泳げるか」の如く能力可能の表現となっている。

(イ) 状況可能

状況可能は「ルッ」を用いる。

○ コアンニ クラカトコデ ジノヨマルツモンカ。(こんなに暗い所で字が読めるものか。)

④ 否定の表現

ここでは、習慣的な言い方のみ取り上げる。

(ア) 「ノサン」

○ キョーア アツシテ ノサンヨ。(今日は暑くてたまらないよ。)

このように「耐えられない」というときの慣用的表現であるが、若年層では聞かれない。

(イ) 「イナカッ」

「いけない」という意味で、全層で盛んに使用される。福江方言では、打消は「ーン」と表わすが普通であるから、「イカン」となるのが自然だ。しかし、それが「イナカッ」となったのは、「け」と「な」が入れ違って、inakei / → inakja / となったのだろうか。(前述の通り、連母音がinとなる傾向がある。)

○ タブマエ、テバ アラワンバ イナカッゾ。(食べる前、手を洗わないといけないぞ。)

⑤ 敬語表現

福江では、敬語表現は「クダハレ」以外みあたらない。「クダハレ」は例えば、

○ スマンバツテ、コンホンバ カヒテクダハレ。(すまないけれど、この本を貸して下さい。)

のように盛んに使われる。丁寧に表現しようとする、他に敬語らしいものがないので、文末詞「ナー」などで、

やわらかい印象を出している。

### 三節 主部

主語・主題の表示を形成している助詞について述べる。

(ア)主格表現の「ガ」「ノ・ン」

○バスノ キタヨ。(バスが来たよ。)

○アタシン イクケン。(私が行くからね。)

○ソツガ ヨカ。(それが良い。)

○コツガ アマカ。(これが甘い。)

主格表現には、「ノ・ン」「ガ」を使用する。但し、「ガ」の方は、特別に指示する場合や他と比較して言う場合に聞かれるようである。総じて、代名詞は他と比較するときに出てくることが多いから、「ガ」を伴うことが普通である。しかしながら、人称代名詞の場合は別で、

○アツガ ワツカ。(あいつが悪い。)

○アンニゲンノ ワツカヨ。(あの人が悪いよ。)

のように、同じ他称でも格の低い「アツ」には「ガツ」が付き、格の高い「アンニゲン」には「ノ」が接続している。これは、「ノ」と「ガ」の尊卑の区別の名残りらしいことが、上村孝二氏によっていわれている。

(イ)助詞「ワ」の上接者への熟合

主部を形成する「ワ」助詞が、上接者に熟合した形も注目される。

④カラー ションナカネー。(これは、しょうがないねえ) / corewa → cora: /

⑤アガア ドコン ウンマレカ。(君は、どこ生まれ

だ) / agawa → agaa /

⑥ミシエアー、シメタツカナ。(店は閉めたんですか。)

／ Mi jewa → Mi jear: /

⑦モー シケンナ、オワツタツカ。(もう試験は終わったのか。)

／ jikenwa → jikenna /

⑧キョーン シュクダイヤ ムンカヒカネ。(今日の宿題はむずかしいね。)

／ jukuda iwa → jukuda i ja /

「ワ」助詞の含まれたときの変化は「様でない。但し、

⑨と⑩の場合のように、上接するのが $n$ であるときは、必ずナ行連声を起こし、また $i$ であるときは $wa$ は $ja$ となることは確かである。

### 四節 修飾部

①格の表現

(ア)ゼロ表現

場所や帰着点を示す格助詞「に」は、「ニ」かゼロ表現である。

○ツッケンウエ オツ。(机の上に置く。)

○オツモ ソンフネ ノセレ。(私もその舟に乗せてよ。)

などのように、助詞なしでも修飾部となりえていて、むしろその方が多い。

(イ)動作の目的を示す「ガ」

動作の目的を示す助詞「に」は、「ガ」と表現される。

○ホンバ カイガ イツテクツテ。(本を買いに行つてくるね。)

②接続表現

ここでは、順接条件の「ので・から」という意に当たる「テ・テン・テンカ・ケン・ケンガ」だけを紹介しておくことにする。

○ヤジラヒカテン、ソツツアン イケ。(うるさいから、そっちへ行け。)

右の例には「テン」を入れたが、「テ・テン・テンカ・ケン・ケンガ」のどれでも不自然ではない。どれを用いるかは偶発的だが、若年層では「ケン・ケンガ」の方が、老年層では「テ・テン・テンカ」の方が優勢である。

#### 結び

以上、文表現法を中心に福江方言を考察してみた。最初に述べたように五島列島の方言は、研究が進められておらず、上村孝二氏によって初めて五島列島の中の方言の地域差が明らかにされたが、まだまだ本格的な対象となっていない。

終えてみて、行政区画上では長崎県だが、方言では鹿児島に近いと感じた。

いずれにしても、日本中で方言が消えつつあることが叫ばれている今、早急に「生」の会話の記録が望まれる。

#### 参考文献

日本語言文法の世界 藤原与一

方言研究法

九州方言の基礎的研究

九州方言学会

方言学論叢 1

野林正路

全国方言辞典①・② 角川書店

五島列島方言の表現文法(文学科論集 6)

上村孝二

九州地方の方言

古瀬順一

方言学の方法

藤原与一